

II. 主 題

「大腸の非上皮性腫瘍」(カルチノイドを含む)

1) 近傍に sm 癌を合併した上行結腸の最大径 10 mm の MALT リンパ腫の一例

林 俊彦	(新潟臨港総合病院 消化器内科)
吉田 鉄郎・吉田 英毅	(吉田病院)
岡本 春彦	(新潟大学 第一外科)
本間 照・小林 正明 鈴木 裕・中村 厚夫 東谷 正栄・成澤林太郎 朝倉 均	(同 第三内科)

62歳, 女性, CF で上行結腸に表面平滑な粘膜下腫瘍と隆起型の上皮性腫瘍を認めた。前者は鉗子による圧迫で容易に変形し柔らかい病変であった。一方, 後者は硬く, 浸潤癌が疑われ外科的切除が行われた。粘膜下腫瘍は大きさ10×6×2mm で, 組織学的には lymphoepithelial lesion, centrocyte-like cell を認める L-26陽性の腫瘍細胞からなり, MALT リンパ腫と診断された。上皮性病変は深達度 sm2 の高分化型腺癌であった。本例は, 異なる起源の腫瘍がほぼ同一の背景粘膜に認められた点で興味深い症例と考えられた。

2) 盲腸顆粒細胞腫の一例

摺木 陽久・本間 照 小林 正明・鈴木 康史 杉村 一仁・成澤林太郎 朝倉 均	(新潟大学 第三内科)
酒井 靖夫・須田 武保 味岡 洋一・丸田 和夫	(同 第一外科) (同 第一病理)

顆粒細胞腫 (granular cell tumor, 以下 GCT) は, 口腔, 皮膚などに好発する腫瘍で, Schwann 細胞由来と言われている。消化管では食道に好発し, 大腸での発生は稀であり本邦報告例は26例である。今回我々は盲腸に発生した GCT の一例を経験したので報告する。

症例は43歳, 女性, 検診で便潜血陽性を指摘され, 大腸内視鏡検査にて盲腸に7×6mm, 山田Ⅱ型の立ち上がりを示す, 表面平滑な黄白色調の粘膜下腫瘍を認めた。表面に陥凹やびらんはなかった。超音波内視鏡検査では, 腫瘍の主座は第2～3層にあり, 均一でやや低エコーを示した。第4層との連続性は明らかでなかったが, 確定診断を目的に内視鏡的切除を試みた。生食を注入するも

持ち上げられず, 病変表層部のみの切除となった。病理組織学的には粘膜固有層から粘膜下層にかけて好酸性微細顆粒状の豊富な細胞質を持った比較的大型の細胞が胞巣状に集簇していた。PAS 陽性, d-PAS 陽性, S-100 蛋白陽性であり, GCT と診断された。GCT は2%に悪性例がみられるため, 遺残のある本症例には, 追加切除として腹腔鏡下盲腸部分切除を施行した。

3) 当科における大腸非上皮性腫瘍の手術例

星山 圭敏	(柏崎中央病院外科)
谷 達夫・山崎 俊幸	(新潟大学 第一外科)
山際 訓・橋立 英樹	(同 第三内科)

大腸非上皮性腫瘍は比較的稀なものであるが, 近年の内視鏡診断の技術, 器械の進歩により報告例が増加している。

当科における過去15年間の大腸癌手術症例は156例であり, またこの間の大腸非上皮性腫瘍症例は, カルチノイド2例, 脂肪腫3例, 平滑筋肉腫1例, 悪性黒色腫1例である。

脂肪腫の3例はそれぞれ盲腸, 上行結腸, 横行結腸にみられたが, 他はすべて直腸より発生したものであった。

カルチノイドの2症例は局所切除を行った。直腸平滑筋肉腫の患者は69歳の女性で, Miles 手術を行い, 13年以上健在である。

悪性黒色腫の患者は74歳の女性で, すでに腹腔内, 単径部に大きなリンパ節の転移があり, Miles の手術を行ったが, 6ヶ月後に死亡している。

今回は直腸癌, 直腸平滑筋肉腫, 直腸悪性黒色腫の臨床的, 生物学的特徴につき, 比較検討を行い報告した。

4) 当科における大腸非上皮性腫瘍の症例報告 (12例)

下田 聡・小山 真 武田 信夫・田中 典生 本間 英之・鈴木 晋 竹久保 賢 木村 格平	(県立新発田病院 外科) (同 病理)
--	---------------------------

過去20年間に経験した大腸非上皮性腫瘍は12例で平滑筋肉腫2例, 悪性リンパ腫5例, カルチノイド5例であった。局在は平滑筋肉腫・カルチノイドは全例直腸, 悪性リンパ腫は全例右側結腸特に回盲部を中心とした部位であった。治療として平滑筋肉腫, 悪性リンパ腫に対しては癌に準じた手術と VENP・CHOP を中心とした化